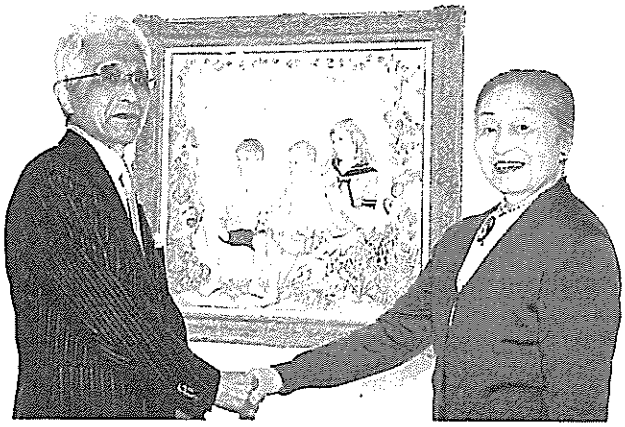
90年前パリで活躍した画家 藤田嗣治と板倉鼎

親族が初対面

松戸で16日まで 作品17点展示

企画展「フジタとイタクラ」が開催中の聖徳大の聖徳博物館（松戸市岩瀬）で、パリで90年前に出会った藤田嗣治と板倉鼎（かなえ）、須美子夫妻の親族が6日、初めて対面した。2人とも「以前から知っていて、久しぶりに会った感じ」と、歓談しながら作品を鑑賞した。

パリを中心に活躍した画家、藤田を大叔父に持つ東京都新宿区在住の藤田嗣隆さん(81)は「あの時代は本当に多彩な画家が集まっていた。板倉鼎もオリジナリティーがあり、本当にいい絵を描いている。若くして亡くなったが、凝縮したものが噴出しているように感じられる」と作品を見つめた。嗣隆さんは会社役員を退任後、大学で美学を学んで学芸員の資格を取得し、現在は大叔父の作品を研究している。



初対面し握手する藤田嗣隆さん(左)と神崎眞子さん。中央の絵は藤田嗣治の「庭園の子供達」＝松戸市で

藤田が中心となった仏蘭西日本美術家協会展に参加した松戸育ちの板倉鼎の妹の長女、神崎眞子（まこ）さん(78)＝松戸市在住＝は「企画展に足を運ぶのは10回目です。藤田画伯の作品も展示されていて、久しぶりに会えた友人も多い」と喜んだ。

企画展は同大と松戸市が主催し、藤田の「庭園の子供達」など7点と、鼎の「赤衣の女」、須美子の「ベル・ホノルル連作」など10点の計17点を展示している。入場無料。8～10日は休館。16日まで。【橋口正】